HamaMed-Repository
浜松医科大学学術機関リポジトリ
浜松医科大学
Hamamatsu University School of Medicine

Association of food access and neighbor relationships with diet and underweight among community-dwelling older Japanese

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 浜松医科大学 公開日: 2017-06-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 仲村, 秀子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10271/3185

博士（医学）　　仲村　秀子

論文題目

Association of food access and neighbor relationships with diet and underweight among community-dwelling older Japanese

（日本の地域在住高齢者における食料品アクセス及び近隣関係と食事及び低体重との関連）

論文の内容の要旨

［はじめに］

超高齢社会である日本では、健康寿命の延伸が国を挙げての課題となっている。高齢者の生活機能の維持のためには適切な食事が重要であるが、身近な小売店の消失等により食料品へのアクセスに困難を抱える高齢者が増加している。本研究は、食料品アクセス及び近所付き合いと食品摂取及び低体重との関連を検討した。

［方法］

日本老年学的評価研究2010匿名化データセットを用いて分析した。これは2010年8月から2012年1月にかけて、12道府県31市町村に在住の65歳以上で要介護認定を受けていない住民を対象に、健康や生活状況に関する自記式質問紙を郵送し調査を行ったものである。112,123 人から回答を得て（回収率 66.3％）、居住市町村・年齢・性別が明確な 102,869 人を分析対象とした。なお本調査は日本福祉大学倫理審査委員会の承認を得ている（2010年7月、申請番号10－05）。

分析は、性で層化しロジスティック回帰分析を行い、目的変数を野菜・果物の低摂取（基準：1日1回以上）、肉・魚の低摂取（基準：1日1回以上）、低体重（基準：体格指数18.5kg/m^2以上）とした。説明変数は、年齢75歳以上（基準：75歳未満）、食料品アクセス不良（基準：自宅から1 km内に野菜や果物が手に入る施設がたくさんある・ある程度あるを良とした）、近所付き合いなし（基準：生活面での協力や立ち話するをありとした）、一人暮らし（基準：一人暮らしではない）、低等価所得（基準：年間400万円以上）、学歴 10 年未満（基準：10 年以上）とし、オッズ比と95％信頼区間を算出した。さらに、近所付き合いをありとなしの 2 群に分けて、それぞれの群ごとに食料品アクセス不良のオッズ比を算出した。食料品アクセスと近所付き合いの交互作用も検討した。欠損値は除外し、有意水準は $p<0.05$ とし、統計ソフトは、SPSS ver.22を用いた。

［結果］

分析対象は男性47,289人、女性55,580人であった。食料品アクセス不良割合は男性24.5％、女性28.5％、近所付き合いなし割合は男性30.9％、女性18.9％であった。

食料品アクセス不良は、男女共に野菜・果物の低摂取と関連していた（男性のオッズ比1.18：95%信頼区間1.12–1.25、 女性のオッズ比1.26：95%信頼区間1.19–1.33、以下同様）。また、男女共に肉・魚の低摂取とも関連していたが、低体重とは関連が見られなかった。

近所付き合いなしは、男女共に野菜・果物の低摂取に関連していた（男性 1.38：1.31-1.45、女性 1.57：1.48-1.67）が、肉・魚の低摂取には女性のみ関連していた。

一人暮らしは、男性では野菜・果物の低摂取に比較的強い関連を示したが、女性では関連が見られなかった。低等価所得は、男女共に野菜・果物と肉・魚の低摂取に関連していた。学歴 10 年未満は、女性では低体重と負の関連を示したが、男性では関連が見られなかった。

近所付き合いあり群もなし群も男女共に、食料品アクセス不良は野菜・果物、肉・魚の低摂取に関連していた。更に男性では、食料品アクセスと近所付き合いに有意な交互作用が認められ、近所付き合いなし群はあり群に比べて、食料品アクセス不良と野菜・果物、肉・魚の低摂取とのオッズ比が大きかった。

［考察］

本研究により、近所付き合いが、食料品アクセス不良の野菜・果物、肉・魚の摂取を低下させる影響を緩和する可能性が示唆された。これは、小地域において報告されていたが、全国 12 道府県、都市部・農村部も含めたデータでも確認されたことにより一般化できる可能性があると考えられた。また、男性において食料品アクセスと近所付き合いに交互作用があることを初めて明らかにした。

本研究では、野菜・果物と肉・魚の低摂取との関連を、食料品アクセスと近所付き合いに重点を置いて観察した。その理由は、まず、一人暮らしや低所得、低学歴が食品の低摂取と関連していることは先行研究でも明らかであったことである。また、食品の低摂取改善へのアプローチを考えるとき、そのような個人要因への介入だけでなく、食料品アクセスや近所付き合いといった環境要因への介入も必要であると考えたからである。また、食事と近所付き合いとの関連は、海外では著者の知る限りでは研究されていない。

本研究の限界は、調査項目とした食品群が野菜・果物、肉・魚のみであったこと、更に食料品アクセス及び食品摂取、身長・体重が自記式データであったこと等が挙げられる。

［結論］

食料品アクセス不良は、男女共に野菜・果物及び肉・魚の低摂取に関連していた。食料品アクセス不良は、近所付き合いのない男性に最も影響が現れると考えられる。食料品アクセスが不良であっても近所付き合いを促進させることで、その影響を緩和できる可能性が示唆された。